

第338回

2005年9月25日(日) 13:00 ~ 17:00

短編小説「後姿」

初出「後姿」(『モダン日本』昭和21年5月)

初刊『パリの揺籠』(昭和22年10月15日 南北書園)

司会 ^{ひらやまこれよし} 平山惟美

時間を許す範囲でメモした内容です。発言を簡単にしたものです。いわゆる公式発言ではありません。記録系の主観もかなり入っています。(管理人)

- A 心に残る話。戦争の大変さを感じた。この怖さを伝えるのは、大変なことだと思う。この二人はうまくいくのかなあ。最後には、ほっとした気分になる。
- B 姉と同じところが印象に残った。最後の後ろ姿の場面でどうなっていくのかなあと考えた。あまりにも悲しみが深いと人間は無表情になる。短編で、短いけど良い印象だった。
- C 一般の家庭まで爆発させるという国際法違反。激しい中での明るい希望があると少し感じた。
- D 落っこちたら爆発するものではなくて、醤油爆弾という顔にくっついて燃えるという感じ。
- E 皆さんが言っている感じ。P109 上段が印象に残る。律子さんは随分お待ちでしたは・・・すると彼は・・・。鶴子は彼が怒ったと思った。
私は、おしゃべりだった・・・そういうと彼は微笑した。中津にとってどういう意味合いがあったのか？文章表現で、良いところがあった。P119 ピアノが焼けた。ピアノ線がそのまま焼き残っていた。このひゅうげんに感心した。
大きな不幸を悲しむと言うことを忘れたのかもしれない。悲しさを超越するのではないのかと感じる。復員して彼女が待っているところに訪れる、その切なさ。男女の間の切なさが中津がどのように立ち上がっていくのか。登場人物が非常に少ない。
- F 2点考える。一つは生と死。姉のようにしたった律子の死。生きて帰ってきた中津。もう一つ自然の死。人間が一夜に死んでしまう。霊を殺すという表現。いつもの自然がある。殺してしまう人間。同じ思い。自然は変わらない。この移り変わり。後ろ姿に希望を見る。律子の死をどうこえていくのかなあ、二人が結ばれていく気が

する。

- D 運命の別れ道。
- G 短い作品。実際こういう事があったのではないか。このころの世相がよく見えてきた。日本はなぜスーパーを押し入ったりしないのか。やはり本当に生きる死ぬかでは究極で同じではないのかと思った。空襲で逃げる場面は臨場感があった。大きな不幸に悲しむ事を忘れていたのではないか。何も感じる事が出来ない。子供が戦争で死んだのにカエルがやかましくてうるさい。その母の気持ちがわかる。最後の三行の余韻を感じる。この二人は、結ばれるかもしれない、律子の影がつきまとうのではないのか。
- H ピアノは骸骨のように生々しく 当日まで弾いていたピアノ 美しい音色を出していた。この方が死を感じる。
- I 戦争体験のお話は例があった。違うところでは亡くなっていたと思って結婚した。後ろ姿はモダン日本 一回こっきり。鳩が舞戻ってくるように。文学の本質では人間の生き方につながる。戦争と平和について考えられる。生き方の意味で感じる。多くの読者はそういう生き方を感じる。中津は7年間しなに行った。外地に行った。7年間離れていても律子さんを思った。初恋の女性は、一年しないうちにドイツに行った。生きていればハッピーエンドだけど、人間の生き方を感じる。
- D 多分一般的な男の場合は興が冷める。非戦闘員で死ぬ。直撃というのは
- J (この当時の兵役の質問を受けて) 兵役は長い人、軍歴や職業軍人、戦争では長かった。徴兵制は公平であってもいろいろアンバランスがあったのではないか。つじつまが合わないところが目についた。家中という書き方、全身にひびきて、家から火をふく魔風のような悲しい風だった。「魔風恋風」は、魔物が誘う風。何時間も佇んでいるのは異常。東大の野球部最後のショートだった。東大は続いて昭和18年に野球が亡くなった。最後のショートではない。野球は東大開成学校が東大の前身。一高時代というのがあります。長い作品の序章のデッサンではないかと思う。
- D 現役と一般招集の違い
- J 招集は民間人から
99%特別な将校の道が開かれている。一兵卒で古山駒男 三高京大、ビルマで最後。現実には、三高で2等兵で招集。昭和19年で招集兵。戦争は続けられない。招集札状は半年やれば予備士官学校に行く道がある。昭和18年12月に招集。
- H 明治35年の父は徴兵検査。現役は検査で合格したものではないか。赤紙が来たときは小学校一年生だった。志願は17歳でも行った。現役は二十歳だった。第2乙

はランクが下がっても行った。戦争しない頃、現役ではないか。

- J 予備役に対して現役。現実的に戦っている人を現役。
- H 今年終戦60周年。NHKが終戦日にどういう感想を持っていますか。それぞれ一人一人の思い出があると思う。印象深いのは、関根潤三は皇居行って泣いた。銀座は雰囲気が華やかだった。開放感持った人々がいた。NHKのアナウンサーは内幸町から下町では浴衣をきていた。庶民の気持ちは終わって良かったと思う。大きな悲しみは思考回路が停止する。P107上段から下段から誰も無関心のように歩いて行くのは鶴子は不思議だった。死も恐ろしくならなかった。
- D 女房は亀戸。母親に手を引かれて、熱風が来る。死体が焦げた材木をどけるように逃げた。
- I 短編の短ゆえに本を持って来なかった。若い人に読んでもらいたい。ふっつはふられて渡り歩く。恋の重みを感じたのではないか。
- J テレビを見ていた。死語とは最近使われていない。トタン板は中古。穴が空いた。新品のトタンは、手に入らない。使えるドアや柱を使って家を作った。野球の話、小学館の本社の南に開成学校の野球発祥の跡がある。熊谷に15日空襲があった。焼夷弾は赤く燃えながら落ちてくる記憶がある。B29の音が怖かった。防空壕は生き埋めになる。66年前の今日が誕生日。敗戦の翌日に国民学校に入った。
- K 終戦の直前に生まれた。律子さんが7年待ち続けた。2年間連絡がない。会わないで待った。花壺にお骨を入れた。悲しく心が動いた。生と死というのは、神の像を知ることが、戦争に行かなくても悲惨な目に遭う。後ろ姿は、呆然として立ちつくす。後ろ姿はいろいろ取ることが出来る。
- L 福島に疎開した△さん。S14年6月10日。○さんと同級生。さっき□さんが言ったように7年間待ち続けていた。今の話を聞いてあっさり別れて新しいお友達に行く。自分を大切にされた方がよい。中津さんは帰らなければならないということで帰ってきた。先生は、戦争はいけないという小さな家庭の中でも強く感じたのではないか。これからは私たちどうしたら良いのか考えていた。・・・祇園ばやしの舞妓さん、自分の子供を25年間話さない。その強さに人と人との信頼感を決して失われたいと思った。
- J ひびけては方言ではないのか。
- M 短編だったけどそれなり感動した。出征して男が死ぬというパターンではなく、逆のパターン。終戦などその前後多いのだけれどもひどいなあ、悲惨だなあと思ったのは人間の運命。不条理で死んでいくのが戦争が嫌だということ小説で不条理で亡

くなる。戦争は人が起こしたものだ。北杜夫の「神々が消えた土地」という前半が処女作。何年か前の出来事。中学時代に近所の茶目っ気な軍人が亡くなる、ダフニスとクローエみたいな形。マガリアでの加賀乙彦で読み始めた。不条理な話を思い出した。リアカーの徴用。お嬢さんの言葉がきれいと言うことを言いたい。近所で上流。

- N モデルについては心当たりがない。戦争という本当に悲しい時代の中で7年も待ち続けた美しい心を知った。律子さんが命を落としたことが千人針を作ってもらった人に返ってきた。人に聴いてしまえば終わってしまうけど思い出を暖めていたのは美しいと思った。戦争というのは何でもない普通の人を悲しませ不幸にする。戦争の不幸をジワジワと心に染みこむのが有り難いと思った。
- O 私は戦中派です。この文章は対比がはっきりしている。戦争なのに月がきれいに出る。母が亡くなったのがとても不思議。こういう事が日常茶飯事に起こったのは不思議に思う。人間が人間に甘えていた。風上と風下がわからない。月の美しさを感じなかったけど先生は客観的に見えるのが先生の姿。一つの渦巻きに流されてしまわないのが先生の方だと思った。
- D ……東大を出ててっぽを打つポジションではなかった。しなではやられたという事は聴かない。……幹部候補生……。
- P 短編で筋はシンプル。いろいろ深読みするところを聞いた。メッセージはそのとおり。先生のいろいろな心理描写は見事。戦争は北海道にいたから知らない。この作品で理解が深まった。野球選手の時期は変だなと思った。大学では、選手がいなくて混乱したのではないかと。控えめな女性だと文章の中で書かれている。Mさんが言ったとおり、言葉使いが丁寧。軽くてぺらぺら話していたのに吃驚した。女性をうまく表現している。戦争の問題が出た。私はソ連よりアメリカの方がよいと軽く行ったけど、この作品を読むと反米感情が強かったのではないかと。温厚の国民性がある、日本人が持つご都合性があった。寄らば大樹……があってアメリカ人に屈服にあったのではないかと。
- D ……鉄筋に逃げたのは蒸し焼きだった。
- Q 女学校の2年だった。広島8月6日のテレビ。セットが家の近所。建物のセットが実物大。産業奨励館などセットが出来ていた。小都市まで全部焼き討ちするためとアメリカ川の資料があった。翌日は人間が右往左往しているのが低空飛行でグラマンが撃ちに来た。広島に新型爆弾が落ちた。律子さんがやられた姿が目には浮かぶ。
6日9日の原爆で終戦を決断をした。それまでの犠牲が大きすぎた。60年前の世界を思い出す作品だった。
- D 低空飛行で機銃掃射をした。高度4000メートルから雨あられに爆弾を落とす。

- R 6時50分で最後の3分間日記が出る。終戦では、その時40年前の鉄砲だった。アメリカのは、三分の一軽かった。速さも違う。若い兵隊で何でも教えてくれた。と妹尾の日記に書かれている。芹沢先生の日記が出ればと思う。律子さんが亡くなったのは残念。別れてしまったあと、葉山一郎が復員してきたら三角関係になりました。
- S 終戦が19歳。226事件など曖昧だけでも記憶に残っている。21年4月の頃の世の中のことが書かれている。書かれている内容は、私もすべて東京にいたのですべて知っている。機銃掃射もうけた。京橋に仕事に行く途中、防空壕に逃げた。この作品を読むと身近なデッサンを読む。広島原爆で苦しんでいる方などもろもろ浮かぶ。一人ずつの苦しみを持っていた。今は人間として日本が日本人をいじめているのではないか。もっと日本人は良かったのではないかと思う。悪くなって来ているのではないか。胸が痛む思いを持った。今回の「あじくりげ」のエッセーを面白く読んだ。この随筆を読んで有り難く思った。
- T 軽井沢にいた。戦争中のつらいことは、思い出したくない。この作品で感じた事は短編で短いけど一人で戦争を終わっていた情景が目には浮かぶ。登場人物に無駄がないということ。後ろ姿の書き出しが、すごいうまいと思った。後ろ姿の姿が読む方に酔っているいろいろな反応を与える。小説家のすごいテクニックだと思った。
- U おもしろい講演会に行った。「フランスと川端康成」を聞いた。フランス文学を読んだ。ペンクラブについては芹沢光治良からいろいろ聞いた。留学の時一緒だった。川端と三島の書簡集を出した。疎開日記について目を通して。たいへん生々しい。今でもタブーなものもある。疎開日誌で戦争で奪ってくれ。自分の希望だけは奪わないでほしい。心の希望を持って立っていると直感した。疎開日誌では、一般的な人も被害を受けている。本当に大変だった。思いくらいの中にどう生きていかか読みとれるか、検討したい。〒を待っていたというのは、東京からの郵便待っていたようです。今日も東京からの便りもないとなんとか書き残している。木下女史からの手紙に慰められる。
- E 鶴子さんと結婚しないでほしいと思う。忠告したい。
- P 私は悲劇だったと思う。鶴子さんと一緒になるとはあり得ない。彼は怒ったのではなく感動した。彼自身は幸せに帰った。彼自身は独り者になった。
- F 結婚するべきだと思う。律子さんの死を超えることによってこの二人は成長する。
- E 人間の純朴さは、出来ないのではないか。

T 明るく終わって希望を持つ。

S ほのかな希望を持つと言うことであった。

D 留守家族への励ましを感じた。女の後ろ姿は絵になる。男性はピンとこない。
ご協力ありがとうございました。

読み直してみて、各発言者の方の私の備忘録だと思って下さい。試みに各発言者の発言を載せてみました。